

ステファノは捕えられ、無理やり最高法院につれていかれ、裁判を受けることになりました。ステファノが神殿と律法を冒瀆している、というのが彼を逮捕しようと画策した人たちの言い分でした。最高法院をつかさどる大祭司はステファノに向かって「訴えのとおりか」と尋問しました。

そこでステファノがそこに居合わせた人々の前で語ったのが、7章の2節から始まる演説です。普通であれば、ここでステファノは自分の身の証し、自分の潔白を証明するための弁明をする、ということになるのですが、彼の演説は違っていました。なぜ、ステファノは、このような場所で、こういう話を始めたのか。しかも彼は弁明のための演説というより、居合わせた人々に向かって説教を語り始めたのです。

ステファノの説教は使徒言行録の中の誰の説教よりも長い。そして内容も多岐にわたる豊かなものです。今朝は、このステファノの説教の冒頭の部分に聞いて、神を礼拝します。

さて、ステファノの説教は、アブラハムの話から語りだされました。アブラハムは旧約聖書・創世記に登場するイスラエルの人々にとっての信仰の父祖でした。

しかしそれにしても、なぜステファノはこんな切羽詰まった状況の中で、アブラハムの話をはじめたのでしょうか。

アブラハムはカルデアのウルというところに家族と共にもともと住んでいました。アブラハムの父親はテラという人でしたが、このテラが家族を引き連れて、カルデアのウルを出発したのです。カルデアというのは、のちにバビロニア帝国を建設していく国でウルはその中心をなす都市でありました。高い文化や、独自の宗教を持っていた。そのカルデアのウルを出た、というのは、なぜなのだろう、と思います。

ところがさらに不思議なことに、ウルを出て、一家が移り住んだハランという土地、そこで一家は財を成し、繁栄していたのですが、今度はアブラハムと、妻と甥だけで、その土地を出発するのです。出るのです。どうしてアブラハムはハランを出発したのでしょうか。ステファノはそれを、聖書を引用し、栄光の神が現れ、「あなたの土地と親族を離れ、わたしが示す土地に行け」と言われたからだ、と述べています。しかし、どうして父に続いて、アブラハムまで、二度にわたって住み慣れた土地を出発しなければならなかったのでしょうか。神

の音が聞こえ、神が示す、神が約束する土地へ行け、との命を受けたからだというのですが、そんなことをどうやって確かめることができるのでしょうか。確かめる、というのは仮に夢の中で神がアブラハムに語ったとして、他の誰が聞いたわけでもなく、ただアブラハムにだけ聞こえたわけでしょうから、確かめるすべもないのです。今ある安定した暮らしから、なぜそんなリスクの大きい冒険のような旅に出なければならないのか。向かう土地は、肥沃な場所から荒れ野です。土地と親族と離れ、新たな地に行く、ということは、根こそぎです。この出発の時、アブラハムは75歳です。青年が自分の家を出るのとはわけが違ふ。そもそも父テラがカルデアのウルを出た、ということ、これも聖書は何も具体的には書いていませんが、これはなぜなのでしょう。どうしてこの親子は住み慣れた土地を出発したのでしょうか。住み慣れた土地とは、ある場所のことだけを言っているのではないと思います。その人の住み慣れた世界、価値観、文化、宗教、環境、習慣とか慣習、生活の様式、当たり前になっていることの全部です。そこから出発する、ということは場合によってはそうしたものを放棄せざるを得ない。手放して、もう一度一から生きる。一個の人間として、新しい現実の中で生きる。そこを出なさい、と誰かに命令されたわけではない。ただ自分の心の中にそういう神の音が聞こえてきた、というのです。そしてそれが、否定しても、否定しても否定しきれない声としてアブラハムの中で響いてきた。あるいは父テラもそうだったのではないか。アブラハムにとってその出発は、与えられたこの人生、いのちを、神を信じ、神と向き合う中で生きる、というおそらくはそれまでとは全く違う歩みを始めることでした。

これは何もアブラハムという人だけの特別の経験なのではない。わたしたち一人一人も、この人生において出発ということを経験していくのです。

例えば、洗礼を受ける、ということを見ると、これは明らかに一つの出発です。そもそも神を信じるとか、イエス・キリストの救いを信じるとか、これは誰かに命令されたり、強要されたりすることではありません。聖書を読んだり、礼拝に出席したりする中で、自分の中で一つの促しというか、神の愛に応じて生きていこう、神を信じて生きていこう、という声が大きくなっていくのです。誰かに命令されたわけではないから、自分が無視して、無視することができるのなら、その声はとりあえず遠のいていくのでしょう。しかし、無視することができない。その促しが自分の中に否定できない形で大きくなっていく。そしてあるとき、それは自分の中の決断となり、洗礼を受けて出発するのです。

この出発によって、その人の生き方は、住み慣れた世界から離れていくのです。自分の価値観とか、自分の捉えてきた世界、というのではなく、神の語る

言葉、イエス・キリストの言葉によってこの世界を見、価値を見つめなおすのです。そのことは結果的に、新しい一個の自分というものを再構成・再創造していきます。新しい自分になる、と言ってもいい。出発は一度きりでも、一度出発したら、ゴールまでまっしぐら、というのでもない。洗礼を受けたことを起点にその人がどれだけ出発をし続けていけるのか。そもそも神の言葉に聞く、と言っても客観的な基準があるわけではない。その人がそれを自分の中に響くものとして、自分の中での促しとして、受けとめ経験していく中で、神の言葉を聞く。そしてその言葉によって生き、世界を見つめ、価値を見直す、そういうことの中で、人は具体的に出発していくのです。

何度かお話ししていることですが、アルベルト・シュヴァイツァーという人がいました。彼は、神学者として大変優れた人でした。フランスのストラスブール大学で神学の講義を彼はしていました。と同時に、彼はまた大変優れた音楽家でもありました。パイプオルガンの演奏家として、当時フランスの第一人者であったヴィドールという人の指導を受け、一流のオルガニストとして、名声を博していました。一流の神学者であって、一流のオルガニスト。これがヨーロッパにおいてどれほど稀有なことか。その一つを極めることが実に大変なことだからです。そういう中で彼は、40歳の時に、自分の中に響く声、語りかけられる声を聞くのです。自分の中の促し声です。それはこれまではわたしは自分のために生きてきた。しかしこれからは人のために、他者のために生きなければならないのではないか、という声です。もちろん彼の中にはいろいろな声があったでしょう。しかし彼にはその声が日毎に否定できないものとなり、やがて一つの決断を生み出していく。彼は医者になって、当時医療が全く不十分だったアフリカの地で、医療活動をはじめていくのです。

もちろん人々は驚きました。そもそも、神学者としても、音楽家としても、その将来を多くの人々から囑望されていた人です。なぜ40になって医学部に入りなおし、勉強をし、しかもアフリカで医療活動に取り組むのか。誰にでもわかる説明などないのです。自分の中に響く促し声、自分に語りかけてくる声、彼はそれに聞き、出発をしたのです。

アブラハムの歩みは、自分に語りかける声に耳を澄ますことから始まりました。誰も何の保証もしない、客観的な確証があるわけでもない。彼はその出発について、妻サラと話し合った形跡もない。話し合って決めることではないからです。しかも彼に約束された土地、それは彼がこの地上に生きている間に取得できるものではない、というのです。後半のヨセフ物語にあるように、

アブラハムの子孫は外国に移住することを余儀なくされて、そこで奴隷になるのです。しかも四百年もの間。つまり自分の生きている限りのこの地上生活では約束の実現はかなわない。にもかかわらず、アブラハムは、自分に語りかけられてくるこの声を、最優先しました。自分の内なる声、それよりも自分に語りかけられている外からの声を最優先した。その声のアブラハムにとって否定できないものだったからです。アブラハムは、そのような生きる姿勢を、父親テラから示されてきたのではないかと想像します。信仰の歩みというのは、根本のところ、孤独であるものです。それは感傷的なことではなく、自分一人が一個の人間として、自分の中に響く、語りかけられている声に聞く、という個の課題だからです。誰かと一緒に、というようなものではない。そしてアブラハムは、神と契約を交わす、神が交わそうとされる契約をアブラハムは受ける。これもまた出発です。神と契約を交わして生きる、という必要など、ないと言えば全くないのですから。神の言葉をときどき思い出し、自分の都合のいい形で聞き、都合のいい形で聞かない、というふうに生きていっても何の問題もない。だが彼は契約を交わす。その契約関係の中で自分の生を受け取ろうとしたのです。これはまさしく、まったく新しい出発です。

ステファノがなぜアブラハムの話を始めたのか。まことに興味深い。もちろん、この説教の全体に聞いて思い巡らす必要がある。しかし、今日の聖書箇所から一つのことを聞くとするなら、それは、神殿とか、律法を冒涇しているという人々の声に対して、神から語りかけられる声を聞いて、新しい出発をしている人々がいる。それは神殿に対しても律法に対しても、単に冒涇とか否定というようなことではなく、そこからも出発するという歩みのあることをステファノは語っているのではないか。

わたしたちはどこに向かって、出発していくのでしょうか。